

発表番号 1

水辺林の再生に向けて ～大北川での取り組み～

森林技術センター 森林技術専門官 持宝 美宣
基幹作業職員 仲田 昭一

1 課題を取り上げた背景

近年、森林の多面的機能の発揮や生物多様性の確保が求められおり、その観点から河川周辺に成立する水辺林の役割が再認識されています。

しかし、戦後復興期の木材需要に応えるべく、尾根筋から河川の水ぎわまで植林が行われた結果、森林の生態学的機能の低下が危惧されるところが見受けられます。



森林の多面的機能をより一層発揮する上で、水辺林の再生は不可欠といえます。

森林技術センターでは、水辺域の針葉樹人工林に間伐を実施し、**水ぎわまで植林されている**水辺に成立する広葉樹を種子源として天然更新を促進することにより水辺林を再生する試験を行っています。

今回は、これまでの取り組みとその結果について報告します。

2 具体的な取り組み

2003年から区域を設定し、現況調査を行いました。2005年に林床に繁茂するスズタケの刈り払いを行いました。また、同年、経常の間伐を実施し、搬出されずに林地残材となった間伐木を集積して林内の整理作業を行いました。その後、植生・更新調査等を実施しています。

3 調査結果

スズタケの刈り払いや間伐を実施したことにより林内の光環境が改善されました。

その結果、多くの広葉樹稚樹の侵入が確認され定着しています。定着した理由として、水ぎわに多くの高木性広葉樹が残存しており、これらが種子源となったと推測されます。

樹高成長を見ると、先駆種であるオオバアサガラ・ヤマハンノキの成長が顕著な結果となっています。



4 考察

間伐を実施する際には、母樹となる広葉樹については保残し、植栽木についてはやや強めに間伐する必要があります。

また、間伐により光環境を改善しても、間伐木が林外へ搬出されなければ、その残材は種子の着床を妨げるため、整理は不可欠です。

現在の先駆性主体の樹種群から、今後どのような林型に遷移するのか。目標林型である高木性の広葉樹二次林への誘導は可能か。

継続的に調査を続け、経過を把握していきたいと考えています。



目標とする広葉樹二次林